一

安永三年正月、江戸を震撼させる事件起こった。

元旦の薄明かりの中、市谷八幡に初詣に来た石工の茂蔵が、石段の傍らに奇妙なものを見つけた。

市谷八幡は、文明八年に太田道灌の鎮守として、鎌倉の鶴岡八幡を勧請して創建したものだ。最初は外堀近くにあったが、寛永年間の外堀改修に伴い、市谷御門が造られ、西側に寄った尾張中納言家の上屋敷隣に移された。

鶴岡八幡に対し、末社の市谷八幡は亀岡八幡とも呼ばれ、江戸の八大八幡の一つに数えられる。

境内に昇る石段の途中に世俗茶の木稲荷があって、目を患った者が年の始めに茶断ちの日数を決めて祈願すると、霊験あらたかだと多くの参詣人を集めていた。

元旦の七つ時分のこと、あたりはまだ薄暗かった。

蕾を膨らませ始めた桜の木から、なにかがだらりと垂れている。

「なんでえ、花見の幔幕けえ」

ぼおっと霞んだ両眼をこすったがはっきりしない。茂造は、近寄って手で触ってみた。

（なんでえ、この冷たさはよ……）

次の瞬間、茂造の口から悲鳴が上がり、市谷八幡の境内に響き渡った。

すでに初詣で客の溜めに社殿で待機していた神官たちや宮男たちがこの悲鳴を聞きつけた。

鳥居を潜って石段下に走ると、男が階段の途中で腰を抜かしていた。

「どうしなさった」

白衣の宮男が駆け寄りざまに訊いた。

「く、首吊りだ……」

茂造が指差した桜の枝から死体がぶら下がっていた。

「正月早々なんてことを」

禰宜が愕然とした声を発した。

宮男が首吊り死体を眺め上げ、提灯の明かりを近づけた。女である。

「高力様の奥方様ですぞ」

「なんですと！確かか」

四谷御門に寄ったところに拝領屋敷を持つ寄合席三千石の高力家は、市谷八幡の有力な講中の一人で、代々の付き合いがあった。

当主主税の奥方は数年来、眼病を患い、世俗茶木稲荷に日参していたから、宮男のだれもが承知していた。

「だ、だれが、お屋敷にお知らせなされ！」

禰宜の命で一人の宮男が石段を走り下りていった。

これが江戸を騒がす事件の発端となった。